



ネパールワークキャンプ報告

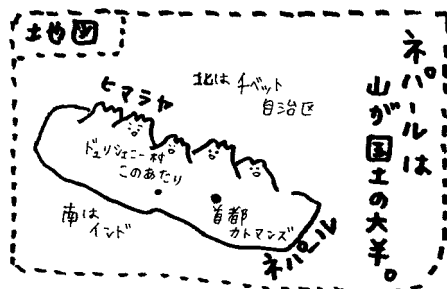
2003.3.5~21

フレンス"国際労働力キャンプ" 関東委員会
(FIWC)

3月5日から21日、ネパールの首都からバスで10時間、ジープで3時間、さらに歩いて4時間という山奥の村、「デュリシェニ村」で、キャンプを開催した。

「幼児教室の建設」これがワーク。まずは土地をならすことから始まって、石を運んだり穴を掘ったりと、基礎工事に汗を流した。

そして更なる指命は村人に笑いを届けること。日本から9名+カトマンズ（首都）からネパール人2名の一行は、道中の村々やキャンプ地で、即席の劇（しかしあなどるなかれ）や歌を披露し、村人に笑いの渦を巻き起こした。わずか2週間しかいなかったはずの村なのに、まるでそこが故郷だったかのように感じさせてくれる暖かさがネパールにはあった。キャンパーの旅立ちの朝、「こんなに親切にしてもらって本当にありがとう」、キャンパーが泣いた。「明日から誰が私の家の前で大声で笑ってくれるだろう」おじいさんが泣いた。



もくじ

ワーク	2
村の紹介	6
大人のためのネパール生活講座	8
よく踊り、よく歌う	10
キャンパーの1日	12
メンバー紹介	14

WORK

さあさあ 学校 建設 だ！

ワークキャンプの醍醐味といえばもちろんワーク。今回は「幼児教室」に使う為の学校を建てるための基礎工事を手伝ってきた。

この村には小学校に行く前の5歳までの子供だけで45人近くもいて、日中ずっと遊んでばかり(日本の子供には今これが求められているのだけど)。そんな子供たちに少しでも将来の役に立つ知育を身につけてほしいという願いから、始められたのがこの「幼児教室」。

村にはもちろん小学校もなく、小学校は1時間山道を歩く隣村へ通わなければならない。幼児教室というのはその小学校まで通えない3~5歳の子供が通うためのもので、簡単な英語、ネパール語、算数を勉強する。この幼児教室があると、子供たちがその後小学校で教育を受ける時にも移行しやすく、協調性も養われるため他の村の子ともうまくやっていけるようになるのだ。

先生のお給料は、デュリシェニーから歩いて1時間の村「サチコール村」に以前ボランティアで1年間滞在していた日本人女性が作った基金があり、その利子が使われている。

基金はその日本人女性の出資が40000ルピー、村から2500ルピーで、合わせて425000ルピー。月に2%の利子がつくので、その分の850ルピーのうち、先生の給料に750ルピー、雑費に100ルピーが使われる。(1ルピー:約1.7円)



中は生徒でぎゅうぎゅう詰め…

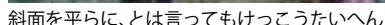
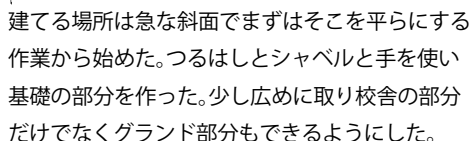


現在の学校

現在の学校は村から5分ほど歩いた山の上にあり、牛小屋のようなもの。そして44人の生徒に対し10畳もないような広さでかなり狭く、生徒は床に座ってぎゅうぎゅう詰めになって授業を受けることになる。屋根はワラブキで壁も土塗りなので雨期には授業をすることも困難になるという。

ワークの初日、キャンパーがはりきって建設予定地に到着すると、のん気なネパール人の一言、「今から測量です」

結局、午前中は測量待ちで何もすることがなかった。子供に「だるまさんがころんだ」や、すもうを教えようとするも、統率がとれず、あえなく失敗。



「よーし、すもうだー」
「この丸から出るんじゃねえぞ！」
はっけよーい！

② 土土を平らに
していきます。



「ウォー！」勢いよくシャベルを動かすもネパールの大地に非力日本人は全く歯が立たない。しかしまた「ウォー！」でもだめ。けどまた「ウォー！」。そんな姿を見て最初はいぶかしげにしていた村人達も次第に表情が和らいで、くすくすと笑うようになってきた。

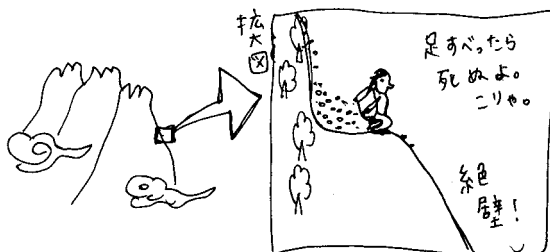


キャンパー村人、入りまじってのワーク

最初は遠まきに様子を伺っていたお母さん達も
 どんどん参加してきて、たちまちワーク地が人で
 いっぱいになった。

「ウォー！」そろそろ疲れてきた。日本人キャンパーからお母さんは「ほら！かしてみな」とばかりにクワを取り上げる。ザクツザクツ。「さすがお母さん！」驚くキャンパーにお母さんは照れたように微笑んだ。

③ セメントに使う小石 & 壁に使う岩を 取りに山へ…



【ドコナムロ】
ネパール独特のかご
「ドコ」。頭にかける縄
「ナムロ」。2つあわせ
て「ドコナムロ」キャン
パーは慣れないた
め、村人の半分ほどの
量しか運べず、無念。

どうしてもへつびり腰になっちゃう。

学校を建てる際に山からとれる材料はすべてフル活用、車も通れないため、すべて人力で運ぶ。岩、砂利、砂、木材… そんな事は朝飯前とでもいうようにみんなドコナムロをひょいと担いで出かけていく。そしてそれ以外の必要な材料はすべて山道2時間半も下って、取りに行かなければならないのだ。シャベルだってつるはしだって、先の金属の部分だけ持ってきて、あとは自分達で作ってしまう。



山から運んだ岩。どっさり。

ドコナムロに日本人で最初に挑戦したのはカンちゃん(菅野)、パワフルなお母さんにまぎれて意気揚々と出かけていった。そして帰ってきて第一声「これ マジ死にますよ!」。

しかしカンちゃんは生と死をわける絶壁に日本男児の意地を見せるべく何度も挑戦する。いつしかカンちゃんはお母さん達の人気者になる。



子供には負けていられない(けど負ける)

キャンパーの感想

- ◎日本人の働きづぶりはとても素晴らしく、ぼくはみんなと一緒に働けたことを嬉しく思うよ。日が経つにつれて仕事の進み具合はどんどん良くなっていったしね!(ナンダ)
- ◎日本人の熱心さはとても好印象!彼らは疲れた様子をみせることもなく、どんどん仕事してくれて、彼らの姿勢には胸を痛めた。(プルナ)
- ◎慣れない肉体労働はハードで、ほとんど何も役に立ってない日が多くて残念だった。無駄な動きや時間が多くて効率よく仕事が進まないのもネパールらしくて良かった。(なおみ)
- ◎なんでも手作業でやってしまうネパール人は本当に尊敬。自分は労働力としてはあまり役に立ってなくて残念。でも仕事におばちゃんと話したのは(何いつてるかあんましかわかんなかったけど)とっても楽しかった。(くみ)

④ 柱用の穴. 壁用の溝も掘る掘る掘る..

次に平らにした地面に学校のサイズに合わせ、四方に木で目印をたて、そして四方に柱を立てるための1×1mの穴を掘る。深さは約7〜80センチほど。

穴の中にはこの枠と岩、セメントを敷き詰め柱の骨組みを固定する。柱の骨組みの周りに木の板を貼り付けそこにセメントを流し込んで柱にする。



てんやわんやのワークもここで終了。基礎までしか手伝えず残念だが、それより何よりワークを通して村人との距離を縮められたことが一番の成果!



ここまででキャンプ終了

キャンプ
後の学校



上の写真は帰国後に垣見さんから届けられたもの。

学校は6月には完成予定で、今頃何もなかったこの斜面には子供達の勉強する姿や笑い声があふれかえっていることでしょう。

異文化コミュニケーション



キャンプ日程

- 3月5日 キャンパー、カトマンズに現地集合
6日 バスで移動 タンセン泊
7日 垣見さんと合流 タンセン泊
8日 ジープで移動 ドリマラ村泊
9日 徒歩で移動 サチコール泊
10日 徒歩で移動 キャンプ地デュリシェニー着
11日 ワーク開始 祭りで日本食、劇等を披露
12日 日本人3人先に帰る ワーク
13日 ワーク
14日 ワーク 午後休み
15日 河原へピクニック
16日 ワーク
17日 ワーク
18日 ホーリー祭のため一日休み
19日 午前休み 午後古着配り
20日 ワーク
21日 キャンプ終了 ジープでタンセンまで移動

デュリシェニー村

デュリシェニー村は22軒の家が山の中腹に集まって集落をなしている小さな村。
幸いなことに水道はあるが、他は電気もガスもない。
ってことは当たり前かもしれないが、テレビも冷蔵庫もガス台もない。学校だって7ヶ月前までは無かった。「タイムスリップしてみたい…」誰かがそうつぶやいた。
ネパールは多民族、多言語の国、そしてこのデュリシェニー村はマーガル族の村。若者は国の共通語であるネパール語も話せるが、日常はマーガル語で暮らし、年配の人になるとマーガル語しか話すことができない。その場合、老人とキャンパーのコミュニケーションは「日本語→英語→ネパール語→マーガル語」と非常に困難を極めた。

マーガル族は西ネパールと中央ネパールに多く生活しグルカ兵部隊として世界的にも有名である。村の中にも若い頃にインドの軍にいたというおじいさんが



村までの道



山にはこんな道も!? クネクネ



遠くから見たデュリシェニー村



村に2つしかない水道は、牛に占領されることもしばしば

いた。そのおじいさんはお気に入りの帽子をかぶり、私達を見ると敬礼をした。

カトマンズでは薄れつつあるカースト制度も村では根強く残っていて、村では低カーストの人と一緒にご飯を食べることはないそうだ。そしてこの村では今までに他の部族、つまり他のカーストの人と結婚した人はいない。別に他の部族でも結婚できるそうだが、いまだかつて前例はない。

結婚したら男の子が生まれるまで子供を産み続ける。そのため子供が大勢になってしまうということもある。

このように私達から見ると一見変わった習慣が根強く残るマーガル族の村、デュリシェニーである。



何でもおもちゃにになってしまう。たくましい子供達

ネパールの母は 強い!!!

マーガル族の女性は
金の鼻車輪が特徴



色鮮やかな布を
巻いています

子供を背おた
ままで、どんどん
来ます お母さん
キャンパーなんて
10人かかっても
追いつけません

月経につけている
なで、大体の
ことはこなします。
鳥の紋めから
丸切りまで...

子供だらけ

カトマンズ(首都)から一緒にきたネパール人キャンパーに「この村で一番驚いた事は?」ときくと、「自分たちの年代が誰もいない事、それから子供が多すぎる事」と答えた。彼らは異国から来た私達以上に、その村の異質さに気づくのが早かったに違いない。「同じ国に住んでいたのに、こんなところがあるのを知らなかった…」ぼそっと呟いた。村の作物で村の人たちが食べる事ができるのはたったの3ヶ月で、残りはすべて出稼ぎからの仕送りに頼っている。そのため、子供は13歳になるとインドへ出稼ぎに出なければならない、そして1度行ってしまったら10年は帰ってこない。だから村には老人と子供とその母だけが残される。出稼ぎに行く人数は多い方がいい。だからたくさん子供はいた方がいい。



「生きる」オーラを全身から発する子供達

大人のための ネパール生活講座

◎起床◎

 基本的に太陽と共に行動。
なんせ電気がないので夜は不自由、
小夜中電灯は必需品。

◎水◎

到着するまでは、ミネラルウォーターか井戸水
を湧かして飲もうと思っていたのだが、
キャンパー全員井戸水に適応したので
水には困らず小決着だった。
山の水は澄んでいるので平気らしい。
(タタ分...)

◎食事◎

 トイレの時とは
もちろん逆の、右手を
使って食べる。
これも慣れると「ワイルド」で
やみつきになる。

これ
知らずして
 ネパール
来ると
なけれ

◎トイレ◎

重労働たるもの、食べて出るのが基本。
そしてそれがまた自然に戻り...と循環
していく。

基本的に村の周りはどこでもトイレ。
しかし、登はいくらなんでも取れずがっかりで
キャンパー専用のトイレを設置。
しかしそんなもの使わずに、ヒマラヤを
見ながらしたトイレは最高だった〜
お尻を拭くのは左手と水で。
慣れると糸糸より爽快。

◎挨拶◎

「ナマステ」

両手を胸の前で合せて「ナマステ」
ネパールの挨拶はこれ一言で
大丈夫。

◎お茶◎

ネパール人はお茶が大大大好き。
生活に欠かせない。
ネパール Tea に砂糖たくさんお好みで
レモンやしょうが。ちょっとリッチに
山羊ミルク。
疲れた体には甘いお茶が一番!

◎お風呂◎

木村に お風呂なんてナシ！
井戸や川でバシャバシャと水遊びある。
女の人も 体に布を1枚巻いて
器用に 体全体を洗ってしまう。
キャンプの 女性陣は... できませんでしたら
(けど 乾乾燥してるので臭くないよ)
水は冷たいので 日が出てない時は要注意。

◎洗濯◎

洗濯機など ありません。
木村は 手で洗うのが 非常に
うまいので、それをよく観察し、
できるだけ早く習得すべし。



◎酒◎

木村には ロキシー (ネーロルの地酒、焼酎) と
チャンク (どろろく) の 2種類のお酒がある。
好き嫌いに 食欠めは 良し。上品なことは不要。
ネーロル人が 手酌をしても、奮めた酒を断つ
ても、決して 怒らないこと。悪酔いには注意。

◎歌と踊り◎

酒と共に 木村の 生活には
欠かせない。酔いと 勢いに
任せて 踊って 歌うべし。
木村人は、そんな あなたを
待っているはず... 0..

ワークキャンプの様子がネパールの雑誌に紹介されました！



(記事の訳)

仕事を見てびっくり！

タンセンからだいたい35km東、

ジャルパというところにある

「デュリシェニー村」に、9人の日本
人学生が学校を建てる為にやっ

てきた。その日本人達が、ドコ(かど)に石を入れて

運んだり、シャベルで土を掘ったり、コンクリートを練つ
たりして学校を建て始めたのを見て、村人達は非常に
びっくりした。

9~10年間教育を受けた人間は、そのような肉体労働を
するものでないという考えのネパール人たちに、この日
本人たちは大きな手本となりうるだろう。



☆よく踊りよく歌う☆

宴

テレビもなにもないこの村で、村人にとってそれは大切な娯楽NO.1。本当にネパール人は歌と踊りが大好きだ。丸くなって火を囲めば、どこからともなく太鼓が運び込まれ歌がはじまり、そうになったら踊り出さずにはいられない。

しかし過疎状態にあるこの村にはその「にぎわい」をおこすパワーも不足気味なのが現状である。そこで登場するのが私達。「非日常」を持ち込むのは我らが使命。



私達キャンパーは昼間のワークの疲れもなんのその、夜になれば村人に誘われるがままに踊り乱れ狂った。おじいさんはサチの手を取って少々興奮気味になり、「こんな斬新なダンス見たこともない!」とおばあさん達に笑いがおこる。子供達は久しぶりに現れた「お兄さん」のそばから片時も離れようとはしない。疲れてようが不格好だろうがそんなことはお構いなしに踊り続けるキャンパー達。「あーあの2週間楽しかったなあ」そう思ってもらえればネパールまで行った甲斐もあったってもの。1年に1度の祭があるから、あとの364日がんばれる。その精神は万国共通なはずである。「みんなが来てくれて村に活気が戻った。本当にありがとう」別れの日、おじいさんが泣いた。そしてキャンパーも、もちろん泣いた。

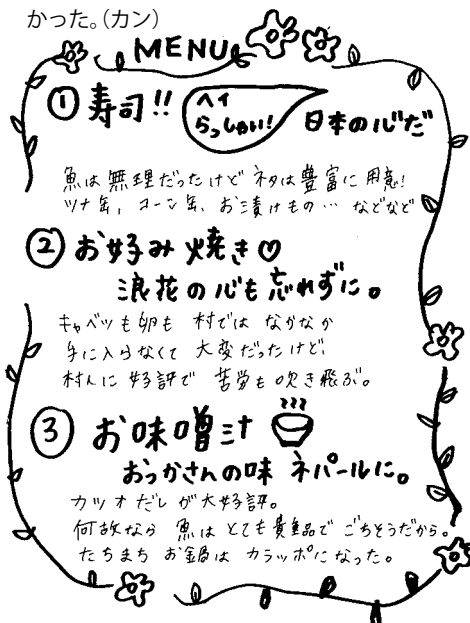
日本食

今まで垣見さんしか外国人がその村にきたことはない。そんな村に私達キャンパーがお邪魔した。日本のようにテーブルの上に和洋中と料理が並ぶことなく一生かけてもないだろうこの村に、日本を少しでも紹介したい一心で日本食をふるまう。



日本食の感想

- ◎ 日本食は発達した国の料理だけあってやっぱりうまいね! 栄養価が高く健康にも良さそうだよ!! (ナンダ)
- ◎ 一回だけでなく何回か食べたかった。調味料や村の食材のことを調べなかった事が悔やまれる。もっと計画をしっかりすればよかった。(サチ)
- ◎ 何よりも現地の人に喜んでもらえたのがよかった。(カン)



肉=命

自分は某大学の畜産学科に所属し日々肉や牛乳などの畜産物について学んでいます。そんな私は最近、日本で口にする畜産物について疑問に感じる事がよくあります。

皆さんは自分が口にする肉や乳について真剣に考えたことはありますか？

普段皆さんが口にするハンバーガーや焼き肉は、本来動物の命を犠牲にして初めて得ることができるものなのです。現在の日本において「自分で動物を殺さなきゃ肉は食うな！」というのは少しバカげた話かもしれません。しかし、私は今の日本では「肉=命」という構造があまりにも見えにくくなっているのではないのかと感じます。それでも食べ物を大切に思わないのも当然です。これはきっと食べ物の無駄につながり、ゴミの増加、そして環境問題にまで発展していくことでしょう。

キャンプでは肉は全て生きた状態からさばき食べました。その為にほとんどのキャンパーが動物を殺すことを体験しました。食べるためにあるべき姿を体験したのです。私たちは命を食べました。



私はキャンパーに対して、この「命を食べる」という感覚を日本でも忘れないでほしいと心から願っています。

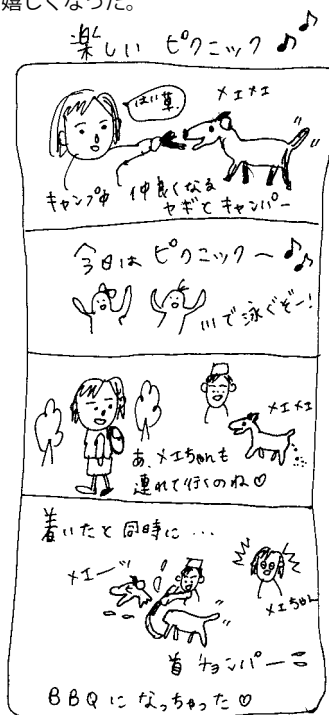
もちろん、村では肉はもちろん、内臓、脳みそ、鶏のトサカにいたるまで無駄にすることはありません。

(山川将弘)

古着配り

村では衣服が不足している。村人の多くは支援でもらった服を着ているがそれも大量にあるわけではなく、着ている服は皆ボロボロだ。

今回私達は少しでもできることを、ということで日本から着なくなった服を持参した。古着は各家族公平に渡るようにくじ引きで配った。このくじ引きはまるで祭りが始まったのではないかしらわせるほどの盛り上がりを見せ大成功に終わった。村の人たちは早速もらった服を着たり、帽子をかぶったりしてくれて、見ている私達も重い思いをして日本からえんこら持って行ったかいがあったなあと嬉しくなった。



チャンパールの日

楽しい21日の
はじまりだ!!



朝 5:00 起床

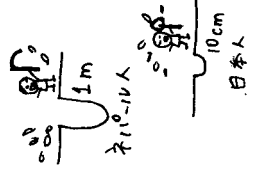
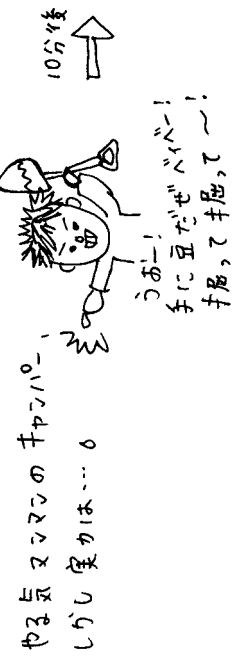


また薄暗いのに周りは外に
鳥がしくしく始まる。
何故か部屋に入りこんでいる
にわたりの鳥の声を、子供の声、
料理を始める音... うるさい...

英語で寝言を
言う日本人
チャンパー



9:00-11:00 ワークだホイ!

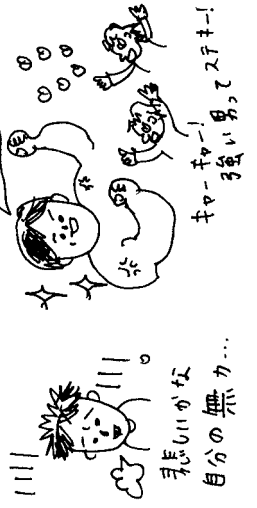
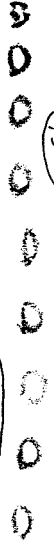


7:00 お茶を飲む。

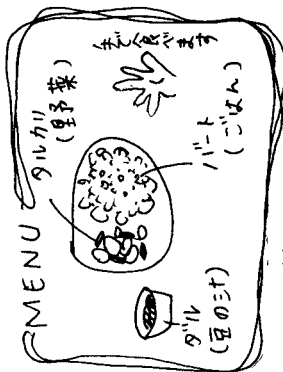
ネパールの朝はお茶で始まるので



ビスケットとお茶で
朝ごはんは おしまい。



12:00 昼ごはんだ〜



「待ちに待っていた 御飯や
 いつも だいたいの このメニュー
 だけど カレーの後は 最高に
 なんでも おいしー!!!
 とこが、椀子ソバのように
 コレから次に 盛られちゃう
 ネパールスタイルに 大苦戦...
 いつも (超) 満腹 でした。



夕食の後は 火を囲んで
 食えや 踊れやの キャッパファイヤー
 踊りまわして 夜は更ける ☆
 (といっても 10時には 寝るのだ) ☆

13:00-14:00 ひと休み



14:00-16:30 再びWORK!

18:00- 夜ごはんだ〜



20:00- 就寝

メンバー紹介

I ♥
NEPAL



宮本久美子(クミ)

キャンプリーダー。優しく厳しいみんなの母さん。ネパールキャンプはクミから始まった。熱い心でネパール4回目。



山川将弘(マサ)

副リーダー。農大で畜産を学び、牛には目がない。好みのタイプは足腰の強い元気で長生きの牛。



伊藤祥江(サチ)

今回でネパールキャンプ3回目。彼女の笑顔を見ると誰もが幸せになる。キャンプ中の目標は10kg減。はつきり言って天才。



新妻直美(ナオねえ)

クミのバイトの上司。クミの出発2日前に一緒に飲んでいたら酔った勢いで参加を決意してしまった。すごい…。キャンプのおねえ。



青木淳(アツシ)

卒業旅行でタイを放浪中に美女(サチ)に会い、ネパールの山奥までついてきてしまった。これまたすごい…。横浜で社会人一年生。世界の青木を目指して日々精進中。



高木香苗(ナナ)

昔コロンビアに住んでいたことがありスペイン語、英語が堪能。ネパール人に「ナナは賢いねえ」と大人気。農大では鶏を飼ってます。



武田美貴(ミキ)

キャンパーのアイドル！？ほんわか名古屋弁で悩殺。サルモノマネで笑いをとることも忘れない。



菅野俊昭(かんちゃん)

賢くて熱い男。寝言が激しく夜中に突然叫ぶ。ある日の寝言:「怖いっ!!こわっこわっこわっこわっ…潰されるかと思った…。」……ってどんな夢見てんだっ!



門間純(もんちゃん、モン・マジユン)

見た目はネパール人。しかしギターを一旦手にすれば向かうところ敵なしのスーパースターに大変身。





サチン・マナンダール(サチン)

得意技は短調のギターとヘンテコダンス。メンバー中No.1お洒落さんでキャンプにお気に入りのジーンズをはいてきてしまい深く後悔。



プレミアム

キャンプのコーディネーター。「ウオー」のかけ声と共に何でもこなし、女性メンバーに大人気…けどかわいいい奥さん、子供有り。がっつり。



デブ(デブちゃん)

別に太っているわけではない。本名。30歳だがどこかかわいいシティー派ボーイ。嫁 募集中。



プルナ

黙ってたんとんと作業をこなす働き者。実は一番頼りになるお兄さん。クミおすすめ。



エク

これまたカッコいい。メンバーが帰る時、一生懸命覚えた日本語を使って女性陣に手紙を書き女性陣の涙を誘った。(しかしたまにかける眼鏡は非常にダサイ。)



ナンダ

メンバーにいつも優しく、働き者。力仕事は任せると言わんばかりの体つきだが、少しお腹が出るのがたまにキズ。

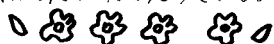


初海外でキャンプ!?

僕は今回のキャンプの副リーダーである山川君から誘われてもう人生初の海外旅行として今回のネパールキャンプへと行くことになった。初めて国外へ出るということで出発前から英語とかうまく話せないけど大丈夫かな?とか、ネパールの風土には馴染むのか?と出来たのか?といった不安がある反面、きれいな景色が見られるんだろうな。とか日本と違う文化を感じたいな。という期待でいっぱいだった。

そして実際にキャンプ地であるトリシェニーヤそこに着くまでに立ち寄ったトリマラ・ウチゴールなどの村々で過ごす内に不安などというものも吹き飛び、期待していた以上のことを経験することができた。行く先々で出会う人々はいつも笑顔で迎えてくれ、こっちがわけのわからないような英語で話すことにも耳を傾けてくれたり、どんどん話しかけてくれたり、隠縮して縮こまってしまう程、一生懸命にמתנהしてくれたりして、その全てが僕の心を穏やかにし、暖かくしてくれた。

最初、初の海外でネパール、しかも観光じゃなくてワーワークキャンプなんて辛いんじゃないの?と友人や家族から心配され、自分でも不安になったが、そんなことはなく、むしろ初の海外旅行だからこそ現地の人々や生活を肌で感じる事ができるネパール、そしてワーワークキャンプに行けて良かったと思っている。



門間 純



ギターで人々を魅了するもんちゃん

キャンプって本当 113人なことを吸収できるのね

カンパ

今回のキャンプによせてたくさんのカンパを頂きました。ありがとうございました。

森元美代治、小河原英貴、君塚隆太、藤澤真人

カヌスの会(ネパール料理パーティー)

に参加した方

その他大勢の方々

順不同 敬を省略させていただきました。引き続きワークキャンプ活動へのカンパ、この学校へのカンパを募集しています。よろしくお願いします。

会計報告

キャンプ会計は以下の通りです。

キャンプ後も赤字を埋めるべく、フリマに食事会と奮闘しましたが、まだまだ足りません。引き続き暖かいご支援、どうぞよろしくお願いします。

収入 (円、6/27 現在)	
キャンパー参加費	253,500
カンパ	125,531
フリーマーケット	44,715
カヌスの会	47,000
計	470,746

支出	
交通、宿泊、食費等	313,500
準備費	15,000
ワーク費	170,000
計	498,500

ネパールワークキャンプ報告

制作: 宮本久美子(キャンプリーダー)

山川将弘(2004年キャンプリーダー)

茂木亮(茂木新聞社)

伊藤祥江(総務)

門間純(すし職人)

「O.K.バジ」 のご紹介

今回のキャンプで現地コーディネートをしてくれた垣見一雅さん

垣見一雅

(かきみ・かずまさ)

1939年、東京生まれ。

1989年からネパールと関わ

りはじめ、ネパールで暖かい村人に囲まれながら暮らすこと10年。村々を巡り村人の話に耳を傾け、そして日本の善意をネパールへ届ける「パイプ役」として草の根で活動している。困ったことがあったら「O.K.バジ」のところへいけばいい。村人からの信頼は厚く、人々は尊敬をこめて「O.K.バジ」(おじいさんの意)と呼ぶ。



垣見さんとキャンパー

著書

「OKバジ」

村人の魂に魅せられ、ネパールの山奥に住みついたひとりの日本人

垣見一雅著

発行元: サンパティック・カフェ



フレンズ国際労働キャンプ(FIWC)関東委員会

2003年6月29日発行

フレンズ国際労働キャンプ(FIWC) 関東委員会

委員長: 藤澤真人

※PDF版には個人の連絡先を掲載していません。

お問い合わせは以下のメールアドレスまでどうぞ。
web@mognet.org

モグネット
www.mognet.org

ネパールキャンプの写真を掲載!
<http://www.mognet.org/>